

1. ジュール・マスネ (仏・1842~1912年) 『タイスの瞑想曲』 (マルシック編曲)

(1)演奏 チョン・キョン=ファ (ヴァイオリン)

イタマル・ゴラン (ピアノ)

録音: 1998年 演奏時間: 4分40秒

(2)解説 ジュール・マスネはフランスの作曲家でオペラが有名。その作品は19世紀末から20世紀初頭にかけて大変人気があった。現在も特に『マノン』、『ウェルテル』、『タイス』は主要なオペラハウスのレパートリー演目となっている。『タイス』の間奏曲である『タイスの瞑想曲』は、ヴァイオリン独奏曲としても人気がある。

「タイスの瞑想曲」は、オペラ『タイス』の第2幕の第1場と第2場の間で演奏される器楽の間奏曲である。第2幕第1場で、修道僧アタナエルは、美貌の快楽主義の高級娼婦(クルチザンヌ)でヴィーナスの巫女の、タイス(アレクサンドリアの聖タイス)に対峙して、豪奢で享樂的な生活から離れ、神を通じた救いを見出すように彼女を説得する。出会いの後のタイスの熟慮の間に、「瞑想曲」が管弦楽によって演奏される。「瞑想曲」の後の第2幕の第2場で、タイスはアタナエルに、自分は砂漠へと彼を追っていくことを告げる。

(3)場面 「クリストフは非常に喜んだ。しかしパリー諸劇場の広告をながめると、マイエルベール、グノー、マスネー、および彼が知りすぎるほど知ってるマスカーニやレオンカヴァロ、などの名前がいつも出ていた。そういう不貞節な音楽が、娘たちの喜びそうなものが、造り花が、香水の店が、約束のアルミデスの園なのかと、クリストフは友人らに尋ねた。すると彼らは、気を悪くした様子で抗言した。彼らの言うところによれば、そういうものは瀕死ひんし時代の最後の名残なごりだった。もうだれもそんなものを顧みる者はなかった。——実際ではカヴァレリア・ルスチカナがオペラ・コミック座に君臨してい、パリアッチがオペラ座に君臨していた。マスネーとグノーとがいちばん多くもてはやされていた。音楽上の三体神ともいうべき、ミニヨンとユグノー教徒とファウストが、一千回の公演を景気よく越していた。」

(「広場の市 1」みすず全集第2巻 329頁上段2行~20行、岩波文庫第2巻438頁10行~438頁18行)